

8+9 現代美術展 — 地域・国際・平和 — RING ART 2016

- [特別出品]
 薄井 崇友 (福島) ●
 織田 千代 (福島) ●
 小峯 宏美 (福島) ●
 山本 伸樹 (福島) ●

- [ブラジル]
 イボネチ・カヴァルカンテ
 と子どもたち ●●

- [日本]
 浅浦 恒敏 (長崎) ●
 伊藤 昭博 (大分) ●
 入江 一樹 (長崎) ●
 ウエダ 清人 (長崎) ●
 上田 貞子 (長崎) ●
 大木 道雄 (埼玉) ●
 加藤 恵 (福岡) ●
 金子 衛 (長崎) ●●
 川田 泰子 (鹿児島) ●
 川野 裕一郎 (山口) ●
 岸川 優子 (長崎) ●●
 国松 実 (長崎) ●
 栗山 泰文 (長崎) ●
 重野 裕美 (長崎) ●
 柴 清文 (奈良) ●●
 関 淳一 (東京) ●
 関 月子 (神奈川) ●
 高島 芳幸 (埼玉) ●
 高橋 俊明 (東京) ●
 武内 カズノリ (千葉) ●
 田中 瑛 (長崎) ●
 田中 睦治 (沖縄) ●
 津野 元子 (千葉) ●
 坪田 政雄 (茨城) ●
 内藤 康 (福岡) ●
 中村 安次郎 (埼玉) ●●
 野島 泉里 (長崎) ●
 平井 真人 (沖縄) ●
 深江 嵯成枝 (長崎) ●●
 福島 雅行 (長崎) ●●
 藤上 慶 (山口) ●●
 古本 元治 (福岡) ●
 増田 和剛 (高知) ●
 松尾 桂子 (長崎) ●●
 松尾 美希 (東京) ●
 松本 幸子 (長崎) ●●
 丸山 常生 (東京) ●
 三木 祥子 (東京) ●●
 溝上 強 (長崎) ●
 村里 政則 (長崎) ●
 森永 昌樹 (佐賀) ●
 守屋 聡 (長崎) ●
 山口 吟子 (長崎) ●
 吉岡 宣孝 (長崎) ●
 吉田 形 勳 (長崎) ●
 (50音順)

- 辻村 涼子 (熊本) ●
 林 典子 (熊本) ●
 前田 信明 (熊本) ●●
 和田 鈴子 (熊本) ●●

- [韓国]
 鄭 美玉 (大邱) ●
 洪 東植 (釜山) ●
 田 秀敏 (昌原) ●
 姜 バレム (昌原) ●
 姜 昌浩 (昌原) ●
 姜 善英 (昌原) ●
 金 在寛 (清州) ●
 金正喜 (清州) ●
 金 福洙 (清州) ●
 李 男美 (大邱) ●
 李 正喜 (昌原) ●
 李 星陸 (昌原) ●
 李 延恩 (大邱) ●
 盧 淳天 (昌原) ●
 朴 南姫 (大邱) ●
 朴 然姫 (大邱) ●
 柳 帝夏 (大邱) ●
 申 京愛 (大邱) ●
 辛 美花 (昌原) ●
 呂 閔鏞 (昌原) ●
 井ノ上 理恵 (昌原) ●●
 浦川 垂津子 (清州) ●
 川田 剛 (大邱) ●
 (ABC順)

- [中国]
 鐘 孺乾 ●
 烏 鳴鳴 (内モンゴル) ●
 烏 鳴雷 (内モンゴル) ●

- [ポルトガル]
 フランシスコ・ランジョ ●●

- [団体]
 三和幼稚園 (長崎) ●
 長崎市立東長崎中学校
 美術部 (長崎) ●
 長崎大学教育学部
 附属特別支援学校 (長崎) ●

- [実行委員]
 井川 惺亮 (長崎)
 岩永 晃典 (長崎)
 小栗 栢 まり子 (福岡)
 佐藤 千代子 (長崎)
 中田 寛昭 (福岡)
 野坂 知布 (長崎)
 波多野 慎二 (長崎)
 廣岩 裕香 (長崎)
 前田 真希 (長崎)

- ...長崎歴史文化博物館
 ●...長崎ブリックホール

8+9 現代美術展 - 地域・国際・平和 - RING ART 2016

主催: RING ART 協力: 長崎歴史文化博物館
 助成: 平成28年度 長崎市芸術文化活動助成事業

8+9 現代美術展 - 地域・国際・平和 - RING ART 2016

報告書
 編集・発行: RING ART 2016年10月
 [ホームページ] <http://www.ringart.jp>



地域における現代美術の現在とこれから

宮田 徹也

今日、美術館の役割は変化している。ニューヨーク近代美術館(アメリカ)、ポンピドゥー・センター(フランス)、テート(イギリス)は巨大な面積と莫大な資金を投じて集客に励む(森美術館編『大型美術館はどこへ向かうのか?』慶応義塾大学出版会/2008年)。一般の美術家はこの美術館に対応すべき作品を制作し(村上隆『芸術闘争論』幻冬舎/2010年)、批評家が評価し(榎木野衣『反アート入門』幻冬舎/2010年)、画商が値段を吊り上げ(小山登美夫『その絵、いくら?』講談社/2008年)、裕福で英語のプレゼンテーションが出来るコレクターが買う(宮津大輔『現代アート経済学』光文社新書/2014年)。長谷川祐子は「現実社会のしがらみやタイムスケジュールから解放される」のが「アートと出会える場所」とする(『「なぜ?」から始める現代アート』NHK出版新書/2011年)。現代美術は富裕層がラグジュアリーな雰囲気を楽しむものに変容し、格差を生む手助けをしていることになる。この条件を満たす日本の美術館とは国立美術館以外に、森美術館(東京)、地中美術館(直島)といった私立でなければ実現しない。公立美術館の僅かな予算で不可能なのだ。

そもそも現代美術とは1915年前後の、人間が人間を人間と思わず大量殺戮をはじめた第一次世界大戦下で「発見」された。個々が生きてよいことを自覚し、他人の存在を尊重し、多様な価値観を認め合うことが可能にしたのだ。国や人種、分野を越えて、多くのアーティスト達が議論し、作品を制作した。今日「ダダ」「構成主義」「バウハウス」と呼ばれる動向がこれに当て嵌まる。現代美術はあらゆる既存の価値、道徳、理念、自らの特権性さえも剥奪し、剥き出しの現実と直面する実験を信条とした。しかし現代美術は、権力から人間を解放する資本主義という僅かに先に生まれた現象から逃れることが出来ない。1929年の世界恐慌で停滞し、第二次世界大戦で止めを刺され、冷戦下では資本主義に絡め取られて今日に至る。しかし本来の意味の現代美術は、時間、場所といった概念すらも易々と乗り越えることができるので、簡単に見えないことがあっても決して【現在】に失われることはない。資本主義の罠に絡め取られず、ファシズムの誘惑にも屈しない現代美術は存在し続ける。そのような現代美術と、世界中で時々巡り合うことがある。

「RING ART 2014」の会場に満ち溢れている作品群は、そのような本来の意味での現代美術である。既存の美術の定義に頼ることなく、自らの創造力と対決し、これまで見たことのない新たな世界を求める個々の作品に、限らない未来の道を信じる事が出来る。著名も無名も、それぞれがそれぞれの作品に溶け込んでいる。アカデミズムではない独自の展示方法にも魅力がある。

「RING ART 2015」では前年以上に東京等、長崎以外の国内のアーティストに加えて、ポルトガル等、海外からも多くの作品が出品された。「RING ART」の地道な活動に対して世界が同調することを示している。無論、メインタイトルの「被爆70年を考える現代美術展」に大きな意義があることに違いはない。我々は未曾有の大惨事を忘れてはならないのだ。

長崎は閉鎖的な田舎であり現代美術の場所などないと本人達が感じるとすれば、それは東京も同じであり、日本全体どころか上述したように、世界がアメリカの言う「正義」に呑み込まれてしまっている。その中で本来の人間の姿を回復する、本来の現代美術作品を制作し、展示することは容易なことではない。しかし、そのような姿を信じ、求め、実現することは最も簡単なことなのだ。現代美術は技術を求めない。決意だけが必要となる。売りたい、有名になりたいという欲望と誘惑から身を遠ざけ、自己の可能性を模索するのはそれ程ストイックな状態ではない。我々は売り買いされる奴隷ではない。一人の人間なのだ。そう自覚すれば、本来の意味の現代美術は何時でも目の前にある。

(日本近代美術思想史研究)

折り鶴パフォーマンス

8月9日(火) 10:00~16:00 場所:長崎を最後の被爆地とする“誓いの火”灯台

毎年8月9日に“誓いの火”灯台の下、道行く人々と一緒に鶴を折りながら平和を祈る「折り鶴パフォーマンス」を実施している。それに先駆け、長崎では長崎歴史文化博物館と長崎大学附属特別支援学校にて「折り鶴ワークショップ」が行われ、同学校に通う生徒たちはパフォーマンスにも参加してくれた。また、近年では福島・田人や川崎でもワークショップを実施し、平和の折り鶴を通して長崎との繋がりが生まれている。参加者が作った鶴は8月9日に行われた折り鶴パフォーマンスにて飾られた。

折り鶴ワークショップ in 旧田人第二小学校(福島)

2016年7月30日(土) 10:00~12:00 「ART MEETING 田人の森に遊ぶ」にて



折り鶴ワークショップ in 川崎市市民ミュージアム(神奈川)

2016年4月10日(日) 14:00~16:00 「樋口正一郎・井川惺亮展」にて 講師:井川惺亮





「ナガサキ誓いの火灯台」と 「8月9日の長崎の夏」

波多野 慎二

今から30年前、井川惺亮は大雨の中、野外のテントの中で横たわったコンクリートに着色した。絵の具が流れないように気を遣いドライヤーで乾かしながら塗り上げた。そのコンクリートは9色の色により作品となった。暑い夏の日、そのコンクリートは高さ20mのクレーン車により空に舞い上がり小高い斜面に設置された。現代美術の作品が初めて爆心地公園に設置された瞬間である。当時8月9日集まった僕らは灯火の燃えるその塔を見上げ、無色灰色の色しか許されなかったこの日に初めて色のあることを語る喜びを噛みしめた。

あれから30年、一度も欠かすことなく行われてきた灯台清掃活動と折り鶴パフォーマンス。長崎に住む作家の生き様を芸術活動へ昇華させる一連の活動である。その活動は8月9日に現地を訪れた方のみが知ることができる。この活動に共感した人、またはふらりと立ち寄った人など様々な国の人達と共に折り鶴を折り、その作品に色を塗る。折りのための折り鶴が一人一人の声を代弁する作品に変わる瞬間である。その声を私たちは一つ一つ灯台に展示する。午後になると折り鶴は高く高く空に向かって灯台の壁を飾る。その空の先には71年前の長崎の空が有り、今と過去を交錯させる灯台の火が燃えている。その平和の火を見つめるとき、またこの日が来たことを実感する。この活動は一過性でない美術活動が生む平和の証言そのものである。

(活水高等学校・中学校教諭)

被爆71年目の 「折り鶴パフォーマンス」のサプライズ

井川 惺亮

原爆落下から71年目に、ついにアメリカ大統領が被爆地広島を訪れ、二羽の折り鶴を添えた。日本人としての実感は平和外交によるどんなスピーチよりも、平和を託した『折り鶴パフォーマンス』の方が、はるかに被爆国への思いやりが伝わったのだ。オバマ大統領が折った折り鶴だからこそ、しかも原爆資料館に、そっと添えたその演技振りはアートのように素晴らしかった。

本来誰が折ってもかけがえのない折り鶴だと思う私がいる。他方でオバマ大統領の演出を見た、もう一人の私があった。その私が、アートによる福島復興を目指す、いわき市田人のART MEETINGに参加した。『折り鶴ワークショップ』実施会場の廃校になった小学校には子どもらの姿がなく、それでも哲学者や国内外のアーティストらがわずかだが、ある一面では理想的な受講者の集まりとなった。彼らは終始一貫して画用紙で折り鶴を折り、思い思いに着色を施した。中でも哲学者の参加はサプライズだった。何故なら彼ら美術評論をしている人は、このようなワークショップをややもすると見識の高さから軽視しがちだからだ。それが思いの他夢中で取り組み、「爽快だった」と二羽仕上げた。アメリカ女流アーティストは「こうして折り鶴に色を着けていると、日本に来て、初めて幸せな気分になりました」とおしゃべりしながら語った。

私はこの思いを今夏8月9日、長崎爆心地の被爆の丘にオリンピアの聖火が灯る『長崎を最後の被爆地とする“誓いの火”灯台モニュメント』の下で、被爆71年目に実施する『折り鶴パフォーマンス』に届けた。着色が制御され縦に緑取るカラフルな灯台、その外壁は白いタイルだ。そこに皆で折った折り鶴を飾ると、折り鶴群と灯台の色彩とが絵画的なシンフォニーとなって輝きを増す。行き交う多くの観光客らが次々と、この美の結晶に目を留めスマホカメラに収める。その姿も『折り鶴パフォーマンス』だ!と、心が躍る。

有名も無名もなく折った火の灯る灯台の折り鶴だからこそ、穏やかな平和な思いが空高く流れる。オバマ大統領がベストな折り鶴を選んだように、私達も既に折り鶴を選択していた。その美的演技進行の真っ只中にあり、「アートで平和を表現する」実感がいつしか蘇る。

(長崎大学名誉教授)

折り鶴ワークショップ in 長崎歴史文化博物館(長崎)

2016年8月7日(日) 10:00~12:00



〈特別寄稿〉'16 折り鶴パフォーマンスを通して戦後71年の長崎を想う

三木 祥子

まずは、昨年の戦後70周年をきっかけに「8+9現代美術展」に参加させていただいて、井川惺亮先生を始めスタッフのみなさまのとても心温まるお優しいお心遣いをいただきましたことに改めてここから感謝申し上げます。

それまで長年、原爆の図丸木美術館での「今日の反核反戦展」に参加したり、被爆地広島には度々訪れていたものの、長崎は遠くから思いを馳せているだけの存在でしたので、先生方のご好誼はたいへんありがたく光栄に思っております。

今年は展覧会だけではなく、長崎市の爆心地公園内にある「誓いの火」灯台モニュメントでの有意義な折り鶴ワークショップにも参加させていただき、みなさまの永年ご活躍なさっているご様子を拝見させていただいたことも貴重な体験でした。特に長崎大学教育学部附属特別支援学校の生徒さんたちや国内外からの訪問者などの一人ひとりと一緒に折り鶴を折り、それをモニュメントに付けていくというパフォーマンスはとても愛に満ち溢れ感動的でその光景は今でも臉の奥から離れることはありません。

最近、長崎市は、被爆した市民や街の惨状をまとめた記録「長崎原爆戦災誌」の英語版「The Nagasaki Atomic bomb Damage Records」を作り世界に発信していく、ということを知りました。アメリカの学校の教科書では「サダコと千羽鶴」のストーリーが取り入れられているということも耳します。また昨年、丸木夫妻の「原爆の図」大展覧会巡りが、ワシントン、ニューヨーク、ボストンで実現しました。

戦後70年から1年が過ぎた今、唯一の戦争被爆国として改めて世界にその実相を伝え、原爆の被害、被爆者のことを世界中に理解してもらうことが重要です。

“No more Nagasaki & Hiroshima!” という揺るぎない私たちの思いを共有していきたい、まさに平和の千羽鶴が世界中に羽ばたいていき、つぎの世代の子供たちに二度とあのようなことが起きないこと、この地球上の原爆と核兵器の廃絶を心から懇願いたします。そして、平和への「誓いの火」をこの地球上の皆さんと共存共有できることを願ってやみません。来年の8月9日も長崎にお伺いできることを心待ちしつつ。

(環境アーティスト)



11時02分 黙祷

折り鶴を折る参加者たち

吉岡氏

〈特別寄稿〉

井川惺亮とRING ART

吉岡 宣孝

70年代は現代美術の絶頂期と言える時代で“物”の本質を追究する「モノ派」と言葉を使った「カミ派」や映像やメディアを使ったメディアアート、空間表現のインスタレーションなど美術の多様な表現領域を獲得した。そんな状況の中、本来の美術表現である色彩とペインティングも見つめ直す時期に入り新しい波「ニューペインティング」が始まっていた。ニューペインティングは色を塗り込めるという最もミニマルな行為から絵画を見つめ直す事から始まったと考える。

人類史上初期に始まる洞窟壁画は、鉄分を含む赤い岩を砕いて潰して動物の油に溶かした顔料を岩に塗り付ける行為、あるいは身体に白い土を塗り付ける行為が絵画の始まりである。原始の絵画は呪物であったため呪力を持たねばならない。そのため絵描きは呪術師であったに違いない。古代の洞窟壁画の絵画は様々な動物の姿が描かれ狩をする人間も描かれ狩の恵みを祈る儀式に使われたと言われている。顔料を身体に塗り付けるボディペインティングは、強い動物に変身したり、精霊とトランスするための呪力を得る時に動物の特徴を塗り込め、そうして強大な力を得るのである。

井川惺亮の作品はそんな原始の呪術師の様な力強さを感じる。井川惺亮の技法は、絵の具の缶を開けたばかりの原色を刷毛に取り直接布や紙に塗り込め、絵の具が切れるまで広げて、また違う色を塗り広げては塗り、繰り返して激しい色面を対比させ色の膨張と後退性を利用した空間を感じさせる手法は色面が線であったり記号であったりしてもこの手法は現在も変わる事無く続いている。

時代的タイムラインで追うとキャンバスから紙へそして机や椅子などオブジェにペインティング、長崎本線の各駅や長与町ペーロン小屋のペインティングなどへ展開して行く。さらにお菓子の箱や段ボールなど廃品のリサイクルペインティングなど時代に即したオブジェの制作や最近では過去の作品を再利用して新しく制作した組み合わせの時間を繋ぎ合わせた“自己コラボ”とも言える新しい手法にも取り組んでいる。最新の作品は更に不透明なあざやかさを増し色彩の呪力を感じる。以前は色彩と色彩がぶつかり合い空間を形成していたが、新しいところでは、オーソドックスな画用紙に、筆で引かれた色彩の線が何重にも交差し合い線の上に新しく線が乗る“時間軸”が加えられ、色面空間と時間軸空間が入り乱れる複雑な絵画空間を完成させている。

毎年8月9日の原爆祈念日には原爆公園に設置された井川が制作した誓いの灯灯火台の元で行われる「折り鶴パフォーマンス」はグループRING ARTによる来場者に折り鶴を折ってもらい塔に張り付け、空に鶴が飛翔する絵画を作り上げるもので、塔が再生を繰り返す“黄泉帰り”を象徴するイベントになって「折り鶴パフォーマンス」は井川の手を離れ、RING ARTの象徴的作品になっている。

(アーティスト)

長崎歴史文化博物館

2016年8月7日(日)～16日(火)



〈特別出品〉薄井 崇友



〈特別出品〉織田 千代



〈特別出品〉山本 伸樹



〈特別出品〉和田 鈴子



〈特別出品〉小峯 宏美



〈特別出品〉前田 信明



井川 惺亮



伊藤 昭博



岩永 晃典



大木 道雄



小栗 栢 まり子



金子 衛



岸川 優子



佐藤 千代子



柴 清文



中田 寛昭



中村 安次郎



野坂 知布



野島 泉里



波多野 慎二



平井 真人



廣岩 裕香



姜 善英



金在寬



金正喜



李 正喜



深江 嵯成枝



福島 雅行



藤上 慶



前田 真希



李 星陸



盧 淳天



朴 南姫



辛 美花



松尾 桂子



松尾 美希



松本 幸子



三木 祥子



呂 閔暎



井ノ上 理恵



鳥 鳴鳴



鳥 鳴蕾



森永 昌樹



山口 吟子



吉田 形 勸



イボネチ・カヴァルカンテと子どもたち



長崎歴史文化博物館 回廊



フランシスコ・ラランジョ



田 秀敏



姜 パレム



姜 昌浩



公開講座

日時:8月7日(日)14:00~15:30

場所:長崎歴史文化博物館

「アートと日常」 講師:井川 惺亮(長崎大学名誉教授)

平和というような存在は日常を抜きにしては考えられない。日常生活の代表的な姿は、私にとって永遠なる母のようなものである。母性の懐やエナジーはアートする側面です。常に関わっているようであり、私はその根源を探し求める。日常から生まれるアートが、無常となることを更に考える。

参加者から

◇熊本作家から

地震の後、どうしても集中できなかったのですが、(全てにおいて)、描くことも、そうでした。でもリングアート出品がきっかけで、また、日本画材などの持つ力の再発見ができて嬉しく思っております。

ここから見える、ビニールシートの青色が地震のあとからはだいぶ減りました。でもまだ無数です。その不自然な青と木々の緑が私に残り、参加作品ができました。(林 典子/熊本)

◇RING ARTに参加して

リングアートに参加して数年になり、私のアートを自由に表現できる場である。それぞれの個性的な作品の展示や仲間とのつながりがあり、ギャラリートークではアートを表現することで改めて自分のアートを問い直すことができ勉強になる。

私なりにアートと自然の融合により、現在では赤い糸を使いオブジェと自然を繋ぐアートのインスタレーション作品をしている。公募展での制作は、時間、制作に縛られ完成することが難しい。その時の判断は集中力と時間の戦いでの制作はリングアートの体験を生かし達成したことを作品に生かしたい。これからもリングアートを通して私の空間アートを追求し超えたい。また、リングの仲間の和をもっと広げたい。(金子 衛/長崎)

◇公開講座の感想

表現者にとって、日々、様々な人達と出会い、その時その空間で、学び、自然界の状況変化を、見詰め、作品は、どんな空間においても、存在感があれば、表現者として、自分自身に、問いかけ、見詰め直す事が、出来る。と思い巡らしながら聞きました。

(和田 鈴子/熊本)



NTT ポケットギャラリー

2016年8月3日(水)~9月11日(日)

被爆70年はみんな一生懸命だったが、その翌年は昨年ほど活発でない。そこでRING ARTでは被爆71年こそ、平和な美を更に求めて踏ん張ろうと、しかも世界一小さなギャラリーから大きな美の表現に挑みたい。

作品スタイルは、RING ARTが推進している現代の美術を先取りする現代美術で、そこには表現の自由が溢れており、同時に平和や国際や地域に根差しており、更には美活(美術活動で文化の復活や促進や刺激を与える)に貢献しています。

何よりも作品群を見て下さい。じっと見ていれば、何かが動き出そうとしています。そうです、出島から平和な美が、かつて鶴の港と言われた長崎港から世界へと羽ばたきます。

出品者:RING ART(常任メンバー)

井川 惺亮・佐藤 千代子・前田 真希・中田 寛昭・波多野 慎二・野坂 知布・廣岩 裕香

<https://www.ntt-west.co.jp/nagasaki/csr/csr.html>(NTTホームページ)

長崎ブリックホール

2016年8月19日(金)~27日(土)



〈特別出品〉和田 鈴子



〈特別出品〉林 典子



〈特別出品〉辻村 涼子



〈特別出品〉前田 信明



三和幼稚園



長崎市立
東長崎中学校
美術部



長崎大学
教育学部
附属特別
支援学校



浅浦 恒敏



入江 一樹



ウエダ 清人



上田 貞子



加藤 恵



金子 衛



川田 泰子



川野 裕一郎



岸川優子



国松実



栗山奉文



重野裕美



増田和剛



松尾桂子



松本幸子



丸山常生



柴清文



関淳一



関月子



高島芳幸



三木祥子



溝上強



村里政則



守屋聡



高橋俊明



武内カズノリ



田中瑛



田中睦治



イボネチ・カヴァルカンテと子どもたち



フランシスコ・ラランジョ



鄭美玉



洪東植



津野元子



坪田政雄



内藤康



中村安次郎



金福洙



李男美



李妍恩



朴然淑



深江嵯成枝



福島雅行



藤上慶



古本元治



柳帝夏



申京爰



井ノ上理恵



浦川亜津子



川田剛

井川惺亮

岩永 晃典

小栗栢 まり子

佐藤 千代子

中田 寛昭

野坂 知布

波多野 慎二

廣岩 裕香

前田 真希



ギャラリートーク 8月27日(土) 13:30~15:00



8+9 現代美術展 - 地域・国際・平和 - RING ART 2016

主催: RING ART 協力: 長崎歴史文化博物館

後援: 長崎県、長崎市、長崎県教育委員会、長崎市教育委員会、ポルトガル大使館、在名古屋ブラジル総領事館、一般社団法人日本ポルトガル協会、長崎日本ポルトガル協会、長崎新聞社、朝日新聞社、西日本新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、NBC長崎放送、NCC長崎文化放送、KTNテレビ長崎、NHK長崎放送局、NIB長崎国際テレビ、長崎ケーブルメディア、エフエム長崎

71年目の「8+9現代美術展」を振り返って

野坂 知布

被爆から71年目の夏、RING ARTの自主企画展には、平和を願う作家が、地元長崎、そして国内外から100名が集結した。展示会場の長崎歴史博物館は江戸時代の長崎奉行所があった場所である。復元された奉行所に続く白壁の長い回廊に、突如現れた現代アート空間は新鮮な驚きがあった。回廊を吹き抜ける心地良い風のようにアート作品は通行人を楽しませた。もうひとつの会場、長崎ブリックホールの展示も充実した。吹き抜け2階で八角形の構造をした回廊には、たくさんの多様な作品が設置された。回廊全体を一望すると、この空間全体が調和したひとつの作品として成立しているように思えた。

今年は熊本を襲った大地震で、隣県の者として大きな衝撃を受けた。平和な生活を揺るがす自然災害の脅威を目の当たりにし、我々ができることは何かを考え、熊本在住の作家を本展に招待した。また、今年福島原発事故から5年目。これまで交流を深めてきた福島作家を本展に招待した。また同時に、今年RING ARTのメンバー4名が福島県いわき市田人の「ART MEETING 田人の森に遊ぶ」に参加した。山間の廃校となった小学校を会場に、インスタレーションや折り鶴ワークショップによって、長崎と福島をつなぐアートの交流はさらに深められた。

今夏は、ブラジルで開催されたオリンピック・パラリンピックの開催で日本は沸いたが、オリンピックに灯される聖火と同じ火が「長崎を最後の被爆地とする“誓いの火”灯火台モニュメント」でも毎月9日に灯される。8月9日長崎原爆の日には、このモニュメントで本展の趣旨を直接伝える平和のイベント、恒例の「折り鶴パフォーマンス」を開催した。ここにも、一昨年から福島県いわき市田人でワークショップを開催し、福島のART MEETINGに集まった方が作った折り鶴をこの灯火台を飾った。また、今年川崎市市民ミュージアムのワークショップも加え、平和の輪は確実に広がってきている。

我々の平和展の企画は、一過性の戦争の悲惨さや平和をアピールする作品を並べるものではない。アートを通して平和の大切さ訴えるあり方は多様であって、我々はまず何よりも芸術としての個々の自由な創造の力が「長崎」という特別な場所に集まることに意義があると感じる。ここに集う作家の年齢も性別も国籍も障害も越えて、人間同士として思いやりをもってつながることが我々の「平和展」の目指す姿である。今回の反省として、その点を報道関係の方へ理解してもらうように伝えていかなければと痛感している。

この展覧会の趣旨に賛同してもらったすべての方々に感謝と敬意を表したい。特に長崎まで足を運んで作品を展示し、「折り鶴パフォーマンス」に参加された作家の姿勢には胸を打たれた。最後に特記すべきこととして、出品した多くの作家の方々、趣旨に賛同いただいた方々から、運営資金への支援をいただいた。ここに集まった平和への強い願いが本展を支えている。

(RING ART会長)



2016.8.9 NHK
長崎市・平和祈念式典
(生放送)
折り鶴パフォーマンスの
様子が放映される



長崎新聞 2016.8.8



展覧会DM

(ご支援いただいた方々)

音辻 尊徳/菅波 優子/田窪 麻則/高本 美恵子/トキアートスペース/西岡 美貴子/兵庫 由紀子/降田 達季/入江 一樹/ウエダ 清人/上田 貞子
浦川 亜津子/大木 道雄/織田 千代/加藤 恵/川田 泰子/金 福珠/関 淳一/関 月子/高橋 俊明/武内 カズノリ/田中 奨/田中 睦治/津野 元子
坪田 政雄/中村 安次郎/林 典子/藤上 慶/古本 元治/前田 信明/増田 和剛/松尾 美希/松本 幸子/丸山 常生/三木 祥子/溝上 敬/和田 鈴子

お問い合わせ: RING ART事務局(野坂) E-mail: info@ringart.jp http://www.ringart.jp